

平成22年12月26日(土) 武蔵大学

## 熟 議

教師教育について語ろう～これからの教師教育について

### 【熟議の進行】

60人の参加者は、あらかじめ関心の分野に別れ5人単位で着席しました。

(「養成課程」5グループ「現場の研修」3グループ「教師教育者の開発」4グループ)

以下のワークショップで、自分に関心のある分野を手がかりに、養成一研修一教師教育の連続したキャリア形成について考える機会としました。このワークは、短い時間の中で多様な意見を効率よく浮かび上がらせませんが、タイトな進行のため「より深く」話したい気持ちが残ります。そのため参加者からは、次のステップを約束するいくつかの動きが生まれました。

#### 1:30 市場調査

参加者がどこから来たのか、どんな職種か、世代は、を挙手でアンケート

#### 1:45 グループ内で自己紹介

#### 1:55 アイスブレイク

バルタン星人のワーク

#### 2:10 プレゼンテーション

「日本の教師教育の課題」教師教育学研究会 武田信子 →リンク1

#### 2:35 グループ討議 (step 1)

「熟議カケアイサイト まとめのまとめ」→リンク2

をもとに、グループメンバーに共通する関心をピックアップする。

#### 2:50 休憩

#### 3:00 相互交流 (step 2)

グループの関心事について、他グループのメンバーに意見を求める(取材)をする。特定の人と話し込まず、なるべく多くの人から取材し、同時に他のグループからの取材も受ける。

#### 3:20 意見集約 (step 3)

取材した意見と自分の意見も加えグループの関心事について、模造紙に「○○には何が必要か」をまとめる。

#### 3:40 休憩

#### 3:50 意見発表 (step 4)

グループでまとめた模造紙の内容を発表し(1分間)全員で共有する。→リンク3

#### 4:10 講評

文部科学副大臣 鈴木寛 →リンク4

#### 4:40 閉会挨拶

教師教育学研究会 武田信子 →リンク5

## 【プレゼンテーションの概要】

教師教育には教師教育者の開発、教員志望者の養成開発、現場教師の開発の3種類の層があり、これらが連続して機能してこそ、教員としてのキャリア形成が可能と考えています。

教員を志望し、学力も資質もあり、十分な養成教育を受け免許を取り、採用される学生ばかりではありません。それら学生がすべて教職に就けるわけではない、という採用の問題もあります。資質もなく、教職になる気もない学生が免許を得て現場に出てくる、それ以前に「実習公害」となる学生がいる実態もあります。一般大学と養成大学の単位付与のちがい、教員としての力量形成に影響を与える教員養成カリキュラムの課題、教師教育者の資質や専門性のばらつきなどの課題もあります。

人を育てるコミュニティ（ラーニングコミュニティ）は、大学、教員、学校、生徒、地域が同じベクトルを持って広がっていくのが望ましいと、私は考えています。みんながスーパー教師をめざすのではなく、凸凹を認め合っていく教員コミュニティ。カリスマ校長が引っ張っていくのではなくみんなで議論しながら創っていく学校コミュニティ。競争し排除しあうより多様性を大切にする生徒コミュニティ。

それは、指導力が弱い先生のせいで・・・と言い合う教師集団を、その先生をフォローしあうコミュニティに変えることだろうと思うし、そういう変化は、いじめをやめて多様性を認め合う生徒コミュニティに変えることだと思います。

今日の「熟議」では、これらの層を別個に議論するのではなく、この3つの層を合わせて「教師教育のあり方を議論したい」と思います。興味関心に分かれて座っていただきましたが、その分野の課題は、他の分野とも連動している、という観点で議論をしていただけたらと思います。

## 【グループ発表の概要】

### 「養成課程には何が必要か？」

- ① 同期の学生同士でもしゃべれない人がいるのが現状。  
教師に必要なコミュニケーション力を育てるために「討論」を取り入れる。
- ② 制度は、現場のボトムアップで作ること。  
「育てたい学生像」「教師力とは」「教師教育者の専門性」をクリアにする必要がある。
- ③ 教師になるための資質には、専門的知識以外に何が必要なのかを精査すべき。  
個人の能力で語られる「教師の能力」を組織全体の能力と考え組織化したほうがよい。
- ④ 教科の基礎知識は大学以前に習得し、大学でしか教えられないことに集中。  
わかると教えられるのは別。人権感覚などの養成は？理論と実践のつながりが悪い。
- ⑤ コミュニケーション力はすべての基本。社会との接点をキーワードに多様な教員集団を。  
コミュニケーションをとる力獲得には時間割を詰め込むより、自由に使える時間が必要。

### 「現場の研修には何が必要か？」

- ① 現場の先生は研修をやりたいと思ってやっていない。楽しく学べる研修がしたい。  
自主的な教科研修を支えるサポートセンターが必要で、大学と現場つなぐハブに。
- ② 「授業力を高める」校内研修は重要。自主研修で互いに助け合って高めあえるものに。  
行政研修は、実質的な効果をあげられるような内容になるべき。
- ③ 教室内の問題に根ざした「実践的な」「役に立つ」研修がしたい。  
役立つ研修をするためには、学校そのものが変わり、教師の時間を確保すること。

### 「教師教育者の開発には何が必要か？」

- ① 研究者は社会との接点が薄い。現場で何が起きているかを知り世界観を変える努力を。  
教員同士が接点を持ち高めあうためのフィードバックし、自信を高めることが必要。
- ② 教師教育のスタンダード(ベーシック)を共有する。教師像の共有であり、子ども像の共有であり、社会観の共有でもある。多様なビジョンを共有知とする方法論を求める。
- ③ 自己肯定感・他者理解など、具体的なコミュニケーションスキルを教師に伝える方法論を持つ。「ファシリテーション能力」の必要性も共有されていない現状で、先は遠い。
- ④ 実習する学生が必ずしも教師にならない現状のなかで、受け入れ側にもメリットになるような実習を可能にする。そのために大学と実習生と現場との協働システムを作る。

## 【講評の概要】

年末にわざわざ集まるほどの情熱を持った現場の先生たちの熱心な議論に接して、今日は来てよかったし、忘れかけたことを思い出し、ウェートの置き方、バランス、フォームを修正できたと思います。

私自身は、3つの職域を経てこの15年ほどソーシャルプロデューサー養成にかかわってきました。「パブリック」のプロデュースには大きく言って、文化のような完全にコントロールできないものと、人為的にできることがあると思います。さらに人為的にできることを、ルール・ロール・ツールの3つにわけて考えることができます。

ルールとは、システムをよりよいものに変えること。

ロールとは、システムをうまく使いこなす人材を育てることや人材を生かすチーム作り。

ツールとは、ICT技術や、よくできた授業計画のようなもの。

この3つがバランスよく、かつそれぞれが過不足なく統合することが大事だと考えます。

いい実践をする中で、結果として文化が変わっていくことがあるのではないかと思います。

日本の社会は、教育への関心は高いですが、現場を見る視点やチャンス、現場とのネットワークの乏しい政治家が極端な事例やステレオタイプに増幅された二次情報をもとに政策形成してきました。元はといえばこれも「メディアリテラシー」という教育の問題ともいえる悪循環なのですが。一昨日決着した来年度予算で、文部科学省の予算がはじめて国土交通省を抜きましたが、国交省より5,000億多い予算がついたという報道はされませんね。

ともかく、これまでは教育にお金をかけない政権下で、教育制度を微修正し法案を出し続けてきたおかげで、「通達」が次々と現場に下ろされていく、ということが続いてきたのです。

もうひとつは、たとえばある小学校で事件がおこると、文科省にどうなっているのかと記者が聞き、「直ちに調査します」ということについてです。私は「それは文科省の仕事ではありません。設置者である教育委員会に聞いてください」と答えています。そういう対応を半年続けていたら記者はその質問をしなくなりましたが、文科省がしないようにしても、相変わらず県議会、市議会などでは新聞などの報道をもとに現場に調査を求める悪循環が続いているのではないのでしょうか。長い前置きでしたが、なぜこんなことが起きているのか「ソーシャルリテラシー」を高めていただくために実態をお話しました。

その悪循環を断つのが、私の命題なのですが、ニワトリとタマゴは同時にやるしかない、と思っています。悪循環は、それぞれのプレイヤーが他のプレイヤーが変わらないという前提で最適行動をとっているから起きるのです。誰も悪くはないのですが悪循環が起きるのです。だから、それぞれのプレイヤーが、今までどうやっていたのかを確認しながら、今まで左回りだとしたら「せーの」で一度止め「せーの」で右回りにする、好循環にするきっかけを、現場と教育委員会と文部科学省でやっていき、それぞれのしごとを再定義して、一緒にコラボレートすることを始めたいと思っています。そのためにこの「熟議」をはじめています。

とは言え、それぞれのプレイヤー間の信頼関係ができていません。ソーシャルキャピタルが貯まっていないのです。政権継続のことはわからないのでつらい立場ですけれど、私のいる

間に文科省の若手中心に事務組織化したいとあって「熟議」にもどんどん入れています。今までは、「国会議員の言うように・・・」「マスコミの言うように・・・」と受身的対応に追われ続けてきた文科省のカルチャー(しくみ)を、現場の人たちと一緒にいい方向に、子どもの未来のためにという一点に絞って、いいコラボレーションができるようにしたいのです。意見はそれぞれ違うし、見方はそれぞれです。「そのようにみえている」ことは正しいのですが、それぞれが見えているものを持ち寄って「なぜ違うようにみえているのか」という理由をシェアしながら、「熟議」をすすめたい。「熟議」によって社会的学習が進むことと、それに基づいた自発的な協働行動が起こることを目標にしたいのです。

私はこの10年教育学部の学生と接して、関東一円にのべ700~800人の学生ボランティアを送りました。1年生のときはほとんどが教員志望で、7~8割が教職コースの登録をします。3年生になると、教職の授業は5限6限が多いので、学生はボランティアのリーダーを取るか、サークルのキャプテンを取るか、教職をとるか選択を迫られます。人間力があって、コミュニケーション力があって、ぜひとも教育現場に行ってほしいと思う学生は、そこで教職を取ることを断念し、仮に両立させたとしても、3年生か、4年生の4月には企業が内定を出しているのです。民間企業は、採用予算を1人当たり1,000万くらいかけてあの手この手で力のあるいい学生を奪っていきます。子どもたちに露骨に言いたい放題言われる中で教育ボランティアを続けることができたり、サークル活動を続けられたりする学生は人間力が高いので、民間企業からは内定が「出まくる」のです。そういう学生がとられてしまうと4年生の教育実習の時期に残っているのは1社も内定が出ていない、社会活動が苦手な子、ということになります。4年の10月の教員採用の時期まで残ったのは1社も内定が出なかった学生という構造が、関東圏や関西圏にはあるのです。教員の中で、いかによい教師教育をするかと注いだエネルギーが、全部民間企業にとられていく。就職指導に頭を悩ませるような学生だけが残っているという悪循環があります。

極端な事例をひとつ、わかりやすくお話したつもりですが、いずれにしても、日本の教員養成、教員採用、教員研修改革のためには、もっともっと大所の制度から、社会とつよになつて手をつけていかなければいけないし、教員養成に人的、予算的リソースをつぎ込んでいくための議論をしていかなければと思うのです。

システムをつくるのは文科省の仕事です。いい人材を作る、あるいはいいツールをつくるのは、文科省は応援をする立場であつて、主導的立場ではありません。そこはぜひ、現場のほうでがんばっていただいて、しかし、「こういう応援をしろ」という明確なリクエストがあれば、可能な限り予算を取ってくるのがわれわれ文科省の仕事だと思っています。文科省の基本的なコンピテンシーはルールメイキングと予算取りですから、そこを活躍させていただく。われわれの可能性と限界をぜひ理解していただきたいと思います。

システムについても、現場が「ここが不都合」「ここをポジティブフィードバックして」という声をベースにして作っていきたいと思いますので、普段のコミュニケーションと、大前提となるネットワーク作り、小さな成功事例を積み重ねる中から相互の信頼関係、ソーシ

ヤルキャピタルを上げていくこと、地道ではありますが、これを全国津々浦々で積み重ねていくしかないと思っています

今日は、本格的な教師教育者のみなさんによる密度の高い「熟議」がおこなわれ、これを主導していただいた教師教育学研究会の武田先生と武蔵大学の皆さんに感謝申し上げます。また、参加された皆さんによる教員養成、教師研修の改革についてのネットワークは日本の財産だと思います。これからもよろしくお願いします。

## 【閉会挨拶の概要】

午前中に同じ会場で「15年後の2025年に世の中はどうなり、子どもたちはどんな生活をしているか」を議論しました。生活や産業構造が変わっていても、人が生きている限り変わらないものがあり、自分で考えて生きる力、自律性が必要であるというような意見が出ました。もともとは、日本教師教育学会で、もっと具体的な意見を交わす機械がほしいといていただき、皆様のご協力で、このような形で会を持つことができました。ルール作りと予算獲得をしていただくために、「私たちから出せるもの」を出し切っていくことが必要だと思っております。

私は、カナダやオランダに行っておりましたが、あちらでは10年20年の国民的な議論をしております。当事者からのたくさんの意見を集めて、それをもとに政策を作ることによって、子どもたちが「学校が楽しい」と思える体制を作りました。向うの人たちから、日本でもそうやって作っていけないのではないの？といわれました。一方で、そういう海外のまねではなく、私たち独自のものを作っていかなければならない、とも思っています。最初はワークという形をとりましたが、この話し合いが続いていくことを願っています。ひとりひとりが協力し合って、コミュニティを広げていきたいと思っています。

今日の中で、これには触れられませんでした。文部科学省のスタッフの方が、たくさんの資料を用意してくださいました。ありがとうございました。

粉川先生には、熟議を開くご相談から始まっているいろいろ動いていただきました。どうもありがとうございました。文科省職員の池田さん平野さん出席をありがとうございました。

武蔵大学の副学長、今回いろいろ動いてくれたスタッフにも拍手をお願いします。

鈴木副大臣どうもありがとうございました。最後に、お互いに拍手を送りあって閉会したいと思います。